

ユージーン・スタジオ 新しい海 EUGENE STUDIO After the rainbow

2021.11.20 (sat) – 2022.2.23 (wed)

休館日：月曜日（1月10日、2月21日は開館）、12月28日–1月1日、1月11日

開館時間：10:00–18:00（展示室入場は開館の30分前まで）

会場：東京都現代美術館 企画展示室 地下2階

観覧料：一般 1300円 / 大学生・専門学校生・65歳以上 900円 / 中学生 500円 / 小学生以下 無料

*開催内容は都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。 *All programs are subject to change.

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

協賛：株式会社ゴールドウィン GOLDWIN 株式会社資生堂 SHISEIDO

協力：キヤノンマーケティングジャパン株式会社、PGL、センアード株式会社、株式会社 MagnaRecta、スタンレー電気株式会社

東京都現代美術館 〒135-0022 東京都江東区三好 4-1-1 050-5541-8600（ハローダイヤル）

www.mot-art-museum.jp

MOT+
MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO
東京都現代美術館

（ゴールドウィン）金魚と蓮の花子、2019年 ©Eugene Kangawa

01

展覧会趣旨

東京都現代美術館では、現在、国際的評価が高まっている現代アーティスト、EUGENE STUDIO（ユージーン・スタジオ）の国内美術館における初個展を開催いたします。ユージーン・スタジオは寒川裕人（Eugene Kangawa、1989年アメリカ生まれ）による日本を拠点とするアーティストスタジオで、平成生まれの作家としては東京都現代美術館初となる個展です。

「89+」展（2014年、サーペンタイン・ギャラリー、ロンドン）における作品提供や、個展「THE EUGENE Studio 1/2 Century later」（2017年、資生堂ギャラリー）、「資生堂ギャラリー 100周年記念展」（2018-2019年）や「de-sport」展（2020年、金沢 21世紀美術館）への参加など、国内外の作品発表において高い評価を得ています。さらに、アメリカを代表する現代 SF 小説家ケン・リュウとの共同制作、完全な暗闇で能のインスタレーション「漆黒能」（2019年、国立新美術館）、2021年にはアメリカで発表した短編映画がヒューストン国際映画祭、ブルックリン国際映画祭、パンアフリカン映画祭、Amdocs等のアカデミー賞公認国際映画祭を含む 10以上の国際映画祭で受賞やオフィシャルセレクションに選出されるなど、自由な発想の幅広い活躍に国際的な注目が集まっています。

本展覧会は、平面作品から大型インスタレーション、映像作品、彫刻作品等で構成され、代表作〈ホワイトペインティング〉シリーズ（2017-）や《善悪の荒野》（2017）から未発表の最新作までを一堂に会し、ユージーン・スタジオの多岐にわたる活動に通底する視点や発想、哲学を紐解くものです。個人的な関心から美術史、過去の事象や文明などの主題を並列に昇華させた作品群は、単なる二次元的なヴィジョンではなく、社会の環境や循環のなかで生きる私たちの存在を起ち上げさせます。歴史の転換点ともいふべき現在、批判や皮肉から立脚する表現ではなく、現実を見据えて未来へと漕ぎ出すための叡智を喚起させる作品群をぜひご高覧ください。

02

展覧会の見どころ

平成生まれとして初の大規模個展

これまでユージーン・スタジオは、資生堂ギャラリーの個展「THE EUGENE Studio 1/2 Century later」（2017）や金沢 21世紀美術館のグループ展「de-sport」（2020）等で、さまざまな事象を紐解き、私たちの存在が何に拠っているかを再考させる表現で高い評価を得てきました。本展覧会は『2001年宇宙の旅』のエンディングセットを風化させ、物質とテクノロジーの終焉に迫った《善悪の荒野》をイントロダクションとして、高揚や共感のメカニズムに迫った《「あるスポーツ史家の部屋と夢」より #連弾》や、真っ白なキャンバスに 100人が接吻して“愛”や“信仰”という精神的支柱を出現させた〈ホワイトペインティング〉シリーズ等のこれまでの代表作に加え、発想の深度を探りながら展開させた

数々の新作を一堂に会した展示となります。また、多岐にわたる活動は映画制作にもおよび、2021年にユージーン・スタジオが制作した2本の短編映画は、それぞれヒューストン国際映画祭最高賞受賞を始め、ブルックリン国際映画祭、パンアフリカン映画祭、Amdocs等のアカデミー賞公認国際映画祭を含む10以上の国際映画祭での受賞や、オフィシャルセレクションへの選出が現在も続いています。本展関連企画としてこの2本の短編映画を特別に鑑賞する機会も会期中に実施する予定です。本展覧会は、国際的に期待が高まる若手現代作家の全貌に、どこよりも早く触れることのできる機会となるでしょう。

世界のありように迫る「新しい海」

本展覧会は、さまざまなことが起こり続ける現実の中で、私たちは何を信じることができ、他者と何を共有できる/できないのか等の根源的な問題について、展示室を巡りながら思い起こすように構成されます。

例えば、インスタレーション《善悪の荒野》の瓦礫から立ち昇るように、多彩で繊細な平面作品・新作〈レインボーペインティング〉シリーズが現れます。ある過渡期からその後の新しい時代へ向かう象徴のようでもあり、また虹そのもののように出会った経験が個々と集団の記憶となる作品です。2019年にパリで発表*され反響を呼び、本邦初展示となるインスタレーション《ゴールドレイン》では、天から降り注ぐ金の雨に目を凝らすと、綿々と連なる不可逆的な時間に寄り添う生命、その生命の誕生と存在に不可欠な重力など、当たり前のようにある日常とその成り立ちを再考することになるでしょう。新作〈私は存在するだけで光と影がある〉シリーズは、太陽の下に作品を曝し、陽の光と作品自体の影によって現れたグラデーションの平面作品で、タイトル通り私たちは存在すること自体でポジティブ／ネガティブの両側面を持たざるを得ない存在であることを改めて想起させます。また、本展の特別な体験として、展示室のどこかに、完全な暗闇のなか、見えない状態で生み出された彫像一かたちをとった瞬間から、作った作家当人でさえも誰も永遠に見ることができない彫像の新作《想像》が展示されます。この世界には把握できない未知があること、目に見えないものも存在し、私たちと共存していることを示唆し、この世界と社会との関わりについて再考を促します。

ご紹介した作品は全体の一部ですが、本展覧会のユージーン・スタジオの多彩な作品表現により私たちの意識も多面的な刺激を受け、これまでにない気づきへと導かれることになるでしょう。生命誕生の起源が海であるなら、本展覧会が新たな発想の糧となり、これからの世界のありようへと影響を及ぼす私たちの意識は「新しい海」と言えるのではないのでしょうか。

* 2019年パリ第五大学の大広間で開催された Yuima Nakazato のパリ・オートクチュール・コレクションに作品提供。

03

展覧会構成



0 ゴールドレイン Goldrain

光り輝く金の雨のあと、
瓦礫から大きなレインボーのペインティングが立ち上がる。

太陽とともに作られた鮮やかな翠色の絵画、
19世紀のイコンと White Paintingたち、
すべてを光り輝かせる真鍮の巨大な絵画が空間を作る。

広大な海が広がり、
真っ暗闇で作られ誰も永遠に見ることのできない彫像の
空間が続くー

本展は、あらゆる〈ともにある〉で満たされている。

一瞬と永遠、
光と影、
人と自然、
個人と個人。

美しいことと、そうでないこと。
受容できることと、簡単に受け入れられないこと。

ひとりずつの人生においても 大きな視点でも、
何か一方ではなく、異なる要素とともに、常に存在して
いる。

作品の内部、作品と個人、もしくは空間と空間の間に、
この世界そのものを形容しようと試みる。

寒川裕人

序章 荒野

本展は、2017年制作の《善悪の荒野》¹から始まります。

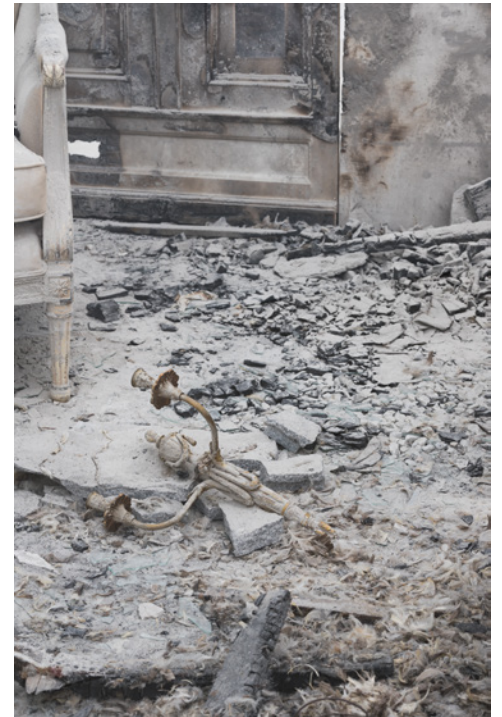
本作は、スタンリー・キューブリックの映画『2001年 宇宙の旅』のラストシーンに登場する原寸大の白色の部屋を再現し、それを破壊し、風化を経た大型の彫刻作品です。劇中でこの部屋は、「モノリス（≡人類を導く高度なコンピューター）が人類を進化させるために用意した」部屋として登場します。この部屋を破壊する行為は、過去の物語に描かれた科学とテクノロジーの発展に象徴される未来像との決別とも言えます。裏側がハリボテの状態となっている本作は、映像やイメージの虚構を示すと同時に、物質の表面と裏側、不確定さを顕にし、物質とテクノロジーの荒野を表現しています。

1章 共生

序章から続く荒野の瓦礫の上の壁面に展示されるのは、あらゆる色彩の無数の点で描かれた淡いレインボー・グラデーションの新作の油彩〈レインボーペインティング〉シリーズ（2021）²。この虹の絵は、物質の荒野を経て傷つきながらも立ち上がろうとしている群衆のように、垂直に立ち上がる存在です。それぞれの虹は、着色後に大気や塵に晒したものの、カンバスを折り曲げ晒される部分と守られる部分を作り出したもの、何にも晒さずにまっさらな状態なもので構成され、人そのものでもあります。



1a



1b 善悪の荒野

Beyond good and evil, make way toward the waste land.



2 群像〈レインボーペインティング〉より
Group portrait, from "Rainbow Painting"

明るい部屋の瓦礫の先の暗転した通路を進むと、その先に広がる暗闇の中に静かに降り注ぎ続ける金色の雨のインスタレーション《ゴールドレイン》(2019)³。極小の金箔と銀箔の粒子が光を当てられることで可視化され、絶え間ないその予測不能の動きは、常に存在しているのに見えていない混沌や人知ではコントロールのできない世界そのものの存在を感取させます。

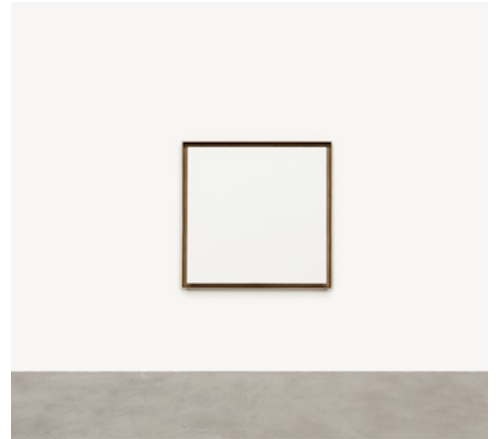


3 ゴールドレイン Goldrain

新作の映像作品《Our dreams | 夢》(2021)⁴では、ドビュッシーの『夢』をさまざまな国でさまざまな奏者が「空弾き」したものをつなぎ合わせた映像が展開されます。想像上で演奏されるのは、奏者の想像の「夢」の曲です。人は何を共有できるのか、飛び越えられるのかという意識への示唆に富む本作は、現実にはしばらく叶いそうもない夢の物語であるかもしれない協調の状況を『夢』という曲に乗せて多様な人々の演奏で紡ぎ出します。



5a



5b <ホワイトペインティング>より
from "White Painting"

暗闇を出ると、一見ただの白いキャンバスに見える<ホワイトペインティング>シリーズ(2017-) ⁵が展示された静寂の空間へと続きます。世界各地で1枚につき100人ほどの接吻がなされた真っ白なキャンバスのこのシリーズは、接吻という行為や、持ち運びするという点において形式上性質を同じくする1800年代末のロシア正教のイコン(聖母子像)とともに展示されます。可動式の礼拝堂とも呼べる本作は、「愛」という見えない存在について、また「受容」することについての提議とも言えます。



4 Our dreams | 夢

架空のスポーツ学者が独自のスポーツ史を構想するという、2014年に卒業制作として制作された作品《あるスポーツ史家の部屋と夢》は、あるべきスポーツ、共同の運動体の姿を模索したインスタレーションです。本展ではその中からチェスの駒の動きをドラムのリズムに置き換えて対戦する空想のゲームとして表現したインスタレーション《「あるスポーツ史家の部屋と夢」より#連弾》(2014)⁶が出品されます。

2章 世界の膨らみ

もっとも原始的な乱数発生器のひとつであるサイコロを、24面体から120面体、1/1などさまざまな形で数十個集め、その場で転がして置く新作の彫刻作品《この世界のすべて》(2021)⁷は、この世界の成り立ちそのものを示唆するものです。無限に近い複雑な可能性の組み合わせから奇跡的に生命が誕生するように、この瞬間のサイコロの出た目もまた、無限のゆらぎの中の世界の瞬間の存在として、一回性の事実そのものであり、「この世界のすべて」のひとつでもあります。



7 この世界のすべて *This is also everything of this world*



6 あるスポーツ史家の部屋と夢より#連弾
Mr. Tagi's room and dream #four-handed



8 <私は存在するだけで光と影がある>より
from "Light and shadow inside me"

新作のシリーズ<私は存在するだけで光と影がある>(2021)⁸は、翠色の染料を絵筆で塗った1枚の紙に筋を入れ、多角形柱にした状態で太陽に向かって立てたものを数週間曝し、退色の原理を用いて太陽とともに作る、紙自身の陰影で成立する作品であり、多角形柱という立体的要素、日焼けという原始的な写真の原理を包含する絵画作品です。ものごとは、存在しているだけで光と影を同時にもつということを体現しています。

本章の最奥部には、この世界そのものを再現しようと試みる特殊な真鍮を用いて描いた巨大な金属の新作絵画シリーズ〈私にはすべては光り輝いて映る〉(2021)⁹が展示されます。映像でも写真でも再現できない、自分を取り囲むすべての風景の瞬間を出来る限り映しとるため、反射した風景を360°の方向から写しとり再度開いたもの、あるいはそのスケッチをもとに描いたシリーズです。

鑑賞しながら移動するたびに反転する光と影、間にもう一層あるような風合いは景色にゆらぎを与え、常に動いている自然の風景そのもののような効果を与えます。自分が世界の中に映り込んで見える風景は、見る距離によってその奥行きを広げていきます。作品タイトルの「私」はまた、この絵画自体のことも指しています。真鍮に映った風景も盤面に乗るすべての色も、絵画自体に映り込む人も、すべては光り輝いて映ります。



9a 制作風景 Production process



9b 奥：〈私にはすべては光り輝いて映る〉より
Back: from "Everything reflects the shining light toward me"

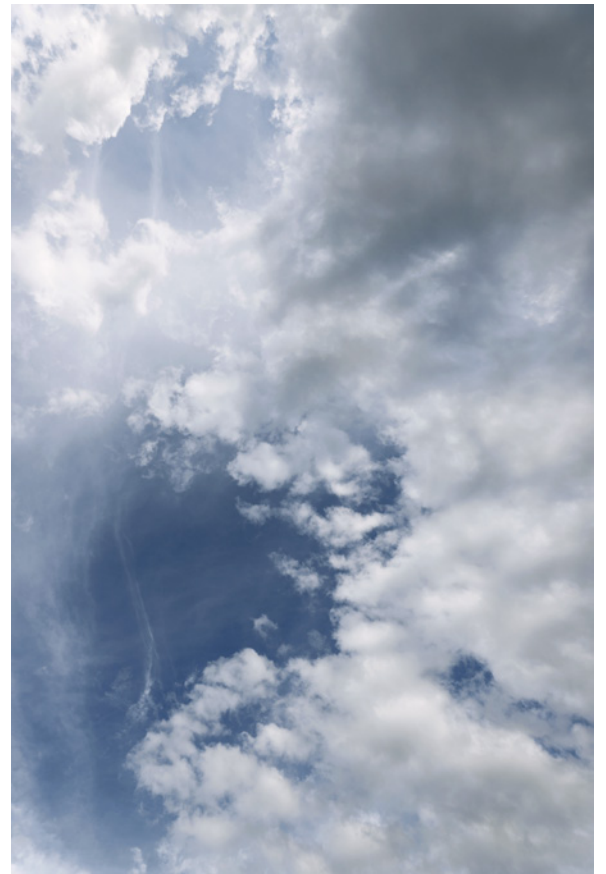
終章 新しい海

最後の章で、展示会場の外へとつながる海の新作インスタレーションがサンクンガーデンに広がります。

この海は、あらゆることは決して終焉して始まるわけではなく、常に同時に存在し続けるこの世界を、祝祭でも、融和でも、破壊や分断でもなく、〈ともにある〉こととしてありのままに受けとめる意識や視座の広がりへの希望であり、それが会場を出た後の日常にまでつながっていくことを示唆しています。

横手に海を見ながら、マイナスの世界へ通じる暗転した通路の先には、今回特別なかたちで体験できる新作の彫刻作品《想像》(2021)が展示されます。この彫像は暗闇の中で制作され、暗闇の中に展示される、制作者自身も決して見る事ができない、永遠に見えない像です。実像は想像上でしか捉えることができない、どうしても知ることができない存在があることを知らしめます。

奇跡的に他者と共有できたり、人知の及ばない事象であったり、美しい展示を通してその意味についてさまざまな想像力を広げ、受けとめた後、最後に現れるのは、新作の写真作品《小さな共通項 (36人で同時に見上げた空)》(2021)¹⁰です。同じ時間に同じ環境下で、複数人が一斉に空を撮影しそれらをつなぎ合わせた本作は、誰も見たことがないつながった空を共働を通して現出させ、人々と作品がつながることも同時に体現しています。視界を広げてくれるそのどこまでもつながる空は、私たちの日常へ「新しい海」がつながっていることに気づかせてくれるでしょう。



10 小さな共通項 (36人で同時に見上げた空) (部分)

A few commons (sky looked up by 36 people at one time) (detail)

04

作家略歴

EUGENE STUDIO ユージーン・スタジオ

寒川裕人（Eugene Kangawa、1989年アメリカ生まれ）による日本を拠点とするアーティストスタジオ。個展「THE EUGENE Studio 1/2 Century later」（2017年、資生堂ギャラリー）や、完全な暗闇で執り行われる能のインスタレーション「漆黒能」（2019年、国立新美術館、シテ方・大島輝久）を開催。その他、「89+」展（2014年、サーペンタイン・ギャラリー、ロンドン）への作品提供、「資生堂ギャラリー 100周年記念展」（2018-2019年）におけるイギリスの建築家集団アッセンブルとの協働、「de-sport」展（2020年、金沢 21世紀美術館）への参加、アメリカを代表する現代SF小説家ケン・リュウとの共同制作『ALTER』（2017年）など。現在、短編映画2本（2021年、アメリカ、日本）が、ヒューストン国際映画祭で最高賞受賞、その他ブルックリン国際映画祭、パンアフリカン映画祭、Amdocs等のアカデミー賞公認国際映画祭を含む10以上の国際映画祭で受賞やオフィシャルセレクションへの選出が続いている。



11 スタジオ風景 The artist's atelier

05

展覧会関連情報

ティザー動画

下記のリンクにて、展覧会のティザー動画を公開しています。

<https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/the-eugene-studio/>

出版物

出品作品や関連作品、会場風景、解説等を掲載した展覧会図録を torch press より刊行予定。
2021年12月頃。

関連事業

ユージーン・スタジオの2本の短編映画の特別上映や、
本展覧会の核となる重要な作品を鑑賞する特別プログラムを予定しています。

本展コンセプト・グッズ “After the rainbow”

展示だけに留まらず、本展の世界観を体現したオリジナルの記念グッズを、
資生堂パーラーや大嶺酒造等を始めとするさまざまな企業とコラボレーションし、
ミュージアム・ショップで展開します。

同時開催

「クリスチャン・マークレー展」、「Viva Viva! 久保田成子展」、「MOT コレクション展」

06

展覧会概要

展覧会名 ユージーン・スタジオ 新しい海 EUGENE STUDIO After the rainbow

会期 2021 (R03) 年 11 月 20 日 (土) ~ 2022 (R04) 年 2 月 23 日 (水・祝) 78 日間

会場 東京都現代美術館 企画展示室 地下 2F

主催等 主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

協賛：株式会社ゴールドウイン、株式会社資生堂

協力：キヤノンマーケティングジャパン株式会社、PGI、センチード株式会社、

株式会社 MagnaRecta、スタンレー電気株式会社

休館日 月曜日 (1月10日、2月21日は開館)、12月28日~1月1日、1月11日

開館時間 10:00-18:00 (展示室入場は閉館の30分前まで)

観覧料 一般 1,300円 / 大学生・専門学校生・65歳以上 900円 / 中高生 500円 / 小学生以下無料

担当学芸員 東京都現代美術館 学芸員 丹羽晴美

展覧会特設サイト <https://mot-solo-aftertherainbow.the-eugene-studio.com>

美術館サイト <https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/the-eugene-studio/>



報道関係のお問い合わせ

「ユージーン・スタジオ 新しい海」広報事務局 (リレーリレー) / E-MAIL: info@relayrelay.net

東京都現代美術館 事業企画課 企画係 広報班 工藤・中島

TEL: 03-5245-1134 (直通) / FAX: 03-5245-1141 / E-MAIL: mot-pr@mot-art.jp

URL: <https://www.mot-art-museum.jp>

※開催内容は、都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。

画像請求書

2021/7/21 発出プレスリリースに掲載した画像は、すべて広報用に使用可能です。

画像ご希望の方は、下記の画像申請フォームか本申込書で、広報事務局宛に希望画像をお申込みください。

画像申請フォーム URL および QR コード

https://bit.ly/ES2021_imageREQ



【広報画像使用規定】

- ・画像は本展広報にのみご使用ください。
- ・画像使用に際し、プレスリリースに記載のとおり、キャプション、作家名、作品名、制作年、コピーライト等を必ずご表記ください。
- ・画像のトリミング、編集、文字載せはお控えください。
- ・掲載前には恐れ入りますが情報確認のため、広報事務局に校正原稿をお送りください。
- ・掲載後には、掲載誌（紙）、HP リンク、DVD、CD 等を広報事務局宛てにお送りください。

媒体名：

掲載・放送予定日：

種別： TV ラジオ 新聞 雑誌 ネット媒体 その他（ ）

御社名：

ご担当者名：

Eメールアドレス：

ご住所：

TEL：

FAX：

- 0. ユージーン・スタジオ 《ゴールドレイン》 2019年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 1a. ユージーン・スタジオ 《善悪の荒野》 2017年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 1b. ユージーン・スタジオ 《善悪の荒野》 2017年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 2. ユージーン・スタジオ 《群像》〈レインボーペインティング〉より 2021年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 3. ユージーン・スタジオ 《ゴールドレイン》 2019年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 4. ユージーン・スタジオ 《Our dreams | 夢》 2021年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 5a. ユージーン・スタジオ 〈ホワイトペインティング〉より 2017年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 5b. ユージーン・スタジオ 〈ホワイトペインティング〉より 2017年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 6. ユージーン・スタジオ 《あるスポーツ史家の部屋と夢より#連弾》 2014年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 7. ユージーン・スタジオ スタジオ風景 2021年 ©Eugene Kangawa
- 8. ユージーン・スタジオ 〈私は存在するだけで光と影がある〉より 2021年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 9a. ユージーン・スタジオ 制作風景 2021年 ©Eugene Kangawa
- 9b. ユージーン・スタジオ スタジオ風景 2021年 ©Eugene Kangawa
- 10. ユージーン・スタジオ 《小さな共通項(36人で同時に見上げた空)》(部分) 2021年 作家蔵 ©Eugene Kangawa
- 11. ユージーン・スタジオ スタジオ風景 2021年 ©Eugene Kangawa

報道関係のお問い合わせ・画像申請先

・「ユージーン・スタジオ 新しい海」広報事務局（リレーリレー）／ E-MAIL: info@relayrelay.net

・東京都現代美術館 事業企画課 企画係 広報班 工藤・中島

TEL : 03-5245-1134 (直通) / FAX: 03-5245-1141 / E-MAIL : mot-pr@mot-art.jp

URL : <https://www.mot-art-museum.jp>

*開催内容は、都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。